

キミよ歩いて考えろ

宇井 純



のびのび人生論 11

宇井 純

のびのび人生論 11

のびのび人生論11 キミよ歩いて考えろ

1979年10月 第1刷 1983年11月 第10刷

定価 900円

著 者 宇井 純（ういじゅん） ©

発行者 久保田忠夫

発行所 株式会社 ポプラ社

160 東京都新宿区須賀町5 振替東京4-149271

印 刷 新興印刷製本株式会社・有限会社トラヤ印刷所

製 本 大成紙工業所

N・D・C 159

8012—086011—7764

はじめに

わたしは、日本の技術者としては、めったに例がないほどの、幸運にめぐまれてきた。小学校から大学まで、そのころとしてはもっともよい条件の教育をうけることができた。

もの心ついてから、農業と工業という、二つのちがった産業を経験した。そのどちらも、幸いにけがもしないで、じぶんの体験にのこっている。この二十年ばかりは、何をつくっても、たいがい商売になり、工場がどんどんおおきくなるという、技術者にとっては、ねがってもないような時期であつた。

日本で一番研究の条件がいいといわれる東京大学にも、学生時代をふくめると二十五年いることになる。万年、助手である。給料はすくないが、そのぶんだけ、つまらない雑用をしないですむ。じぶんが、たいせつだと思ふ仕事だけをできるようにした。上の教授や助教授も、もう、後輩がおおくなつたから、むこうから仕事をいつけられることはない。そして、工場でいっしょにはたらいだ仲間や、日本中の公害をしらべて歩いたときに出会った人びとから、たくさんのことをおしえられた。そのわりに、大学の先生からおそつたという記憶はあまりない。

これまで、大企業の金もうけのために、おしえられてきた技術が、高度経済成長のおわりとともに、方向を見うしなつていきづまっている。そのなかで、まじめな技術者ほど、かべにつきあ

たって苦勞しているが、ここでもわたしは、じぶんの仕事にまよわずにすんでいる。こうした幸運を、つぎの世代にどうしたら、正確につたえられるかが、わたしの責任だろう。

いまの東大中心の教育のどこに問題があり、どうなおさなければならぬか。なかにいるおかげでかなりわかってきたようだ。そして、公害を追って、世界中を歩いたことで、世界における日本の位置についても、かんがえることができる。日本のおかれた条件が、これから大きくかわることはたしかである。

たとえば、日本ではかなり、物質的な繁榮があつて、アジアやアフリカで、今日の食べる物がなくて、死んでゆく人がいるという事実がある。この不合理が、わたしたちに関係ないと、わりきれぬ人は、日本が、どれほどの原料をアジアやアフリカから輸入しているか、知らないのだ。すこし調べれば、わたしたちの繁榮と、海の向うの貧乏とは、はっきりつながっている。つぎの世代は、この現実に知らぬ顔はできない。

だが、現実の教育は、これからもいまとおなじ社会がつづくかのように、學歷を、なによりもたいせつにして、そのための競争にあけくれている。これは、わたしの体験からみても、どうもまちがっている。このまますすめば、競争につよい者の天下になるようにみえて、実は、変化にたいしてはとても、もろい社会ができてしまうだろう。わたし自身も、競争をできるだけさせて

きたおかげで、じぶんをいくらかゆとりをもつて見なおし、じぶんのすすむ道をえらぶことができた。たった一度の生涯を、競争などで、つかいつぶされてたまるかという気がする。

一歩じぶんの足で、歩きだしてみれば、そんな競争を強いる社会など、じつにつまらないことがわかる。その競争能力など、失敗をおそれるばかりで、世のながかわつたらかえって、じまにさえなりかねない。ちがった立場の人と、協力が必要になり、ちがった文明と、接触するとき、日本のなかで、つちかわれた競争能力は、役にたたないばかりか、やっかいものである。ひたすら、安定をめざして、大蔵省や東京海上火災をめざすなど、ちょうど一九四〇年代に軍人志望したようなものである。それより、その努力を、変化を予想して、どんなときにも、じぶんの道をみつけれられる準備にあてるほうが、よほどましである。学校のそとにひろい社会があり、そのために、学校をいかに役立てるか、それを、じぶんの行動でさがしてゆこう。失敗をおそれずに、じぶんの足で歩きだそう。わたしが実験科学者として、技術者として、世界を舞台に生きていられるのも、たくさんの失敗をして、それを他人につたえられるからだ。いわば、失敗の体験によって、世界に尊重されているようなものだ。その、わたしが、ちゃんと生きて、やくだっていることに、わかい人は安心をしてよい。失敗をおそれずに、じぶんの足であるきだそう。

一九七九年九月

宇井 純

キミよ歩いて考える もくじ

はじめに

8 体操はにが手、理科はすき

19 開拓地のくらし

30 知能犯の不良クラス

38 田舎学生いなかの初恋

45 職業をきめる

52 工場で死んだ工員

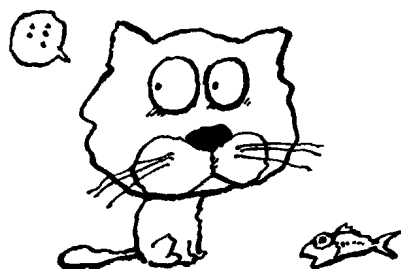
67 転勤、転勤、また転勤

83 魚から水銀が

98 北海道への旅

106 手がかりをつかんだ

123 ネコのたたり



213	202	193	186	173	160	149	138
							はじめて外国へ
							ケンカのコツ
							不器用な学者のほうが……
							「のんびりやりなよ」
							主婦が、勉強にくる自主講座
							よい学校をでたからといって……
							行動をとおして学ぼう
							試験勉強なんてもったいない

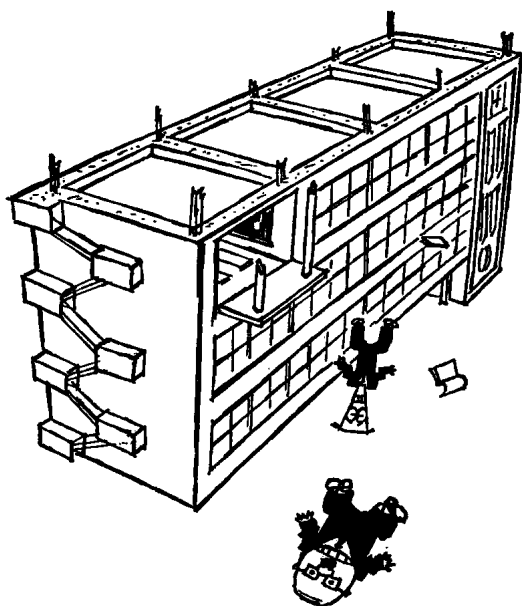
あとがき



デザイン——堀木 一男

イラスト——千葉督太郎

キミよ歩いて考えろ

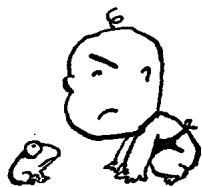


体操はにが手、理科はすき

わたしの両親は、どちらも学校の先生だったから、転任がおおく、わたしは小学校へはいるまえから、土浦、常陸太田、水戸と茨城県のちいさな町をあちこちと、ひっ越してあるいた。そのおかげで、戦前のおち着いた、田舎町のつましいくらしの記憶が、きれぎれに頭のなかにのこっている。

それは、夕方の川べりのなみ木道からみたうつくしい夕日だったり、夜店のにぎわいと、たべられなかった菓子だったり、えん側の日なたぼっここの目の前をとおりすぎた、大きな青大将だったりする。

だが、やっぱり、はっきりした記憶が、つながっているのは、小学校へはいつてからのことだ。子どものころ、そうしたしずかな環境でそだち、よくそとへつれていってもらったのは、い



まになってみると、しあわせだったが、もう一方で、ひっ越しばかりしていたから、なかのよい友だちができなかったのは、さんねんな気もする。大きくなってから、人づきあいが、へたなのは、そのせいだろうか。

しかし、それもむりのないことだった。わたしの父は、そのころまだ、三十そこそこの熱心な先生で、どこの学校でも、しばらくたつと、頭のかたい上役と、衝突しょうとつしてやめてしまうのだった。校長ととつ組みあいのけんかということも、よくあったそうである。

この血は、たしかに、わたしのなかにもながれているが、まだ、いまのところとつ組みあいというのは、やったことがないだけ、子どもであるわたしのほうが、おとなしいといえよう。そのころのくらしは、あまりらくとはいえなかったが、本だけは、たくさんあった。だから、自然に字をよむことは、ずいぶんなれた。

小学校へはいってからは、だんだんたべるものがなくなってきた。戦争がはじまったうえに、弟や妹がうまれて、たべる口のほうもふえたのだから、あたりまえのことだ。水戸にすんでいたころは、となりに、つりのうまい人がすんでいて、父は、いっしょによくつりにでかけた。

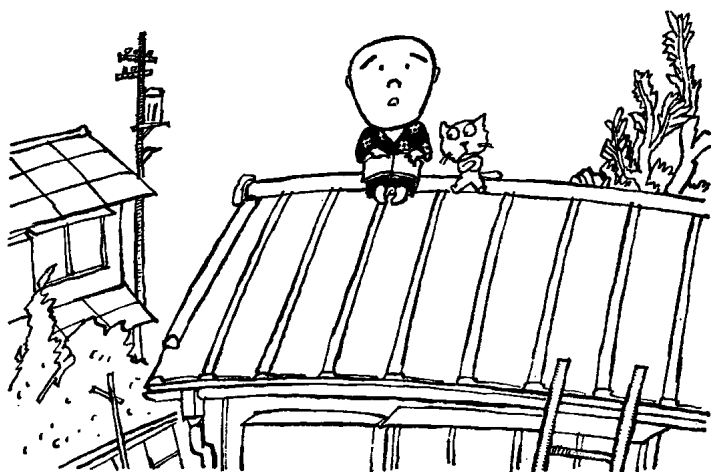
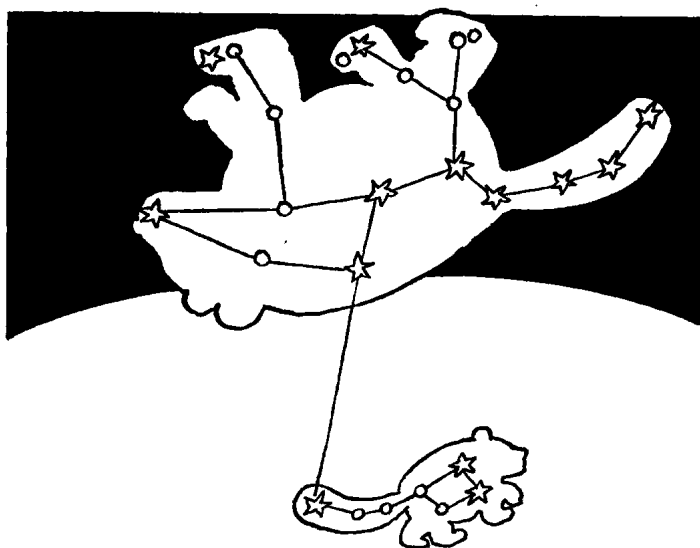
ときには、小学生のわたしもいっしょにつれていってもらったが、どういうわけか、そんなときにかぎって、一ぴきもつれないのだった。退たくつして、あれこれたずねるわたしに、父は、い

ろいろな草の名まえや、たべられるかどうかをおしえてくれた。たぶん、それがきっかけだったかもしれない。小学校でも、理科の勉強は、とりわけおもしろくて、先生も熱心におしえてくれた。入学のときにも、ほかの子はみんな大臣か、大將になりたいといったなかで、わたしだけが、科学者になると、こたえたのをおぼえている。

そのころ、たのしかったのは東京だった。母方の祖父は、退役軍人で、陸軍輜重兵少將だったが、そのころは、少年むけの『機械化』という雑誌をだす仕事をしていた。これは、中学生ぐらいがよむ雑誌で、とうじのことだから、軍隊へ、どのように科学の成果を応用するか、血なまぐさい、戦争の話がおおかった。しかし、一種の科学雑誌の面もあって、なかなか、おもしろいものだったのを、おぼろげにおぼえている。

だが、小学生のわたしに、なによりおもしろく、ふしぎだったのは、この祖父の家には、天文台があったことだ。そのころ、個人で天文台をつくり、八インチの反射望遠鏡を、すえつけるというのは、よほどの大事業だったのだろう。望遠鏡が、たえず東から西へうごいてゆく星をおいかけるために、おおきな時計仕掛がついているのもおどろいたことだった。

祖父は、はじめ新宿のちかくの百人町にすみ、戦争中に、大森の馬込にひっこ越したが、ひっこ越しさきにも、もちろん天文台をたてた。高台から蒲田、川崎の町の灯をながめたり、大熊座の尾



の二番目の星が連星であるのをみたり、白鳥座の首の星が、じつは、青い星と赤い星の連星であることをおそわたりした。また宇宙の起源きげんについて外国では、エディントンという学者と、ジョンスという学者の論争があることをきいたり、ともかく、祖父の話はおもしろかった。

わたしが、科学の方面にすすむことを、小学校にはいるまえから心にきめていたのは、この祖父の話をきいたことが、おおきく作用をしていたのは、たしかだった。

小学校は、水戸の女子師範の附属で、いまでいえば、進学校だったのだろうが、わりあい自由な空氣があつた。また、理科がすぎなら、どんどんさきへすすませてくれて、実験器具なども、かつてにつかえたので、いま、思いだしても、ずいぶんむちゅうで勉強した。この時期に、身についたこともおおかつたように思う。草のはえかたを観察したり、動物をかったり、一つの教科が、得意になると、ほかのことにも自信をもって、とりくむようになることがあるようだ。

このときの経験から、人数さえすくなければ、小学校ではずいぶんいろいろな才能が、ひきだせるのではないかと、かんがえている。もちろん、師範しはん附属というのは、一種の実験校で、設備などは、たしかにほかの学校よりはよく、先生にもめぐまれていたことは、事実だろう。科学への道をすすむのには、幸運だったといえる。なにしろ、小学校二年のときからじぶんでかんがえて、化学実験をやったほどだから、わたしが理科へはいってから、ずいぶんながいことになる。

そのうちに、だんだん戦争がはげしくなってきた。すでに戦争がはじまってまもない一九四二（昭和十七）年の春。航空母艦からとびたった、アメリカの飛行機が、はじめて東京に空襲をかけたとき、水戸の上空をかなりひくくとんでゆき、そのアメリカのマークがよくみえたのをおぼえている。一九四三（昭和十八）年になると、父が海軍の司政官（しせい官）とかになって南方へいくことになった。

子どもたちにとっては、それまで父親はおく（おく）の学校へつとめていて、家には、いないのがふつうだったから、南方といってもあまりピンとこなかった。行くとちゅうで、台湾（たいわん）からおくってきたバナナの干（かわ）ものが、とてもあまかったことと、砂糖キビをしぼったかすでつくった紙をとじたノートがあつたのをおぼえている。

このノートは、おもくて、つるつるした紙で、あまり書きよくなかったが、それでも、物がなくなってきたときだけに、たいせつにつかっていた。たのしかった東京も、あぶなくていけなくなった。一九四四（昭和十九）年の夏には、わたしの母は、子どもたちをつれて、茨城県の古河（こが）にある父の実家へひっ越した。子ども心に感じた戦争の実感（じつかん）は、このころからはじまっている。このころたくさんの子どもたちが、大都会から田舎（いなか）に学校単位、クラス単位で疎開（そかい）して、ずいぶん苦勞をした。それにくらべれば、家族がいっしょにすめただけでも、わたしたちは幸運だった。

だが、水戸では、一けん（けん）の家にすんでいた母親と、四人の子どもたちが、こんどは、六畳一間

にすむのだから、ずいぶんせまくなったという気はした。たべるものもだんだんへってきて、たべざかりの子ども四人をかかえ、学校の先生の給料でやりくりしていた、わたしの母の苦勞は、たいへんなものだったらしい。とちゅうでかわった古河こがの小学校では、みんななかよくしてくれた。「ソカイ」の子どもたちが、いじめられたという話は、よく聞いたが、わたしの場合には、そんなことはなかった。水戸でいろんな実験をやっていたわたしは、先生を手つだって理科実験の準備をしたりした。水戸とちがったのは、古河の子どもたちは、体操や剣道や柔道がよくできたことで、ここでは、わたしはいつもビリだったが、べつにそのことでバカにされるということもなかった。このころの子どもたちは、子どもなりに、みんな能力や志望がちがうことを、たがいに見とめあっていたようだ。

もちろん、からだがいじょうぶで成績のよい子は、そのころ、古河こがのちかくにあった航空機乗員養成所をうけて、予科練になるのが夢だった。わたしは、体操たいそうがにが手なので、中学校へいくことになって、古河からかよえる栃木の学校をうけた。

中学へかようなになると、母のつとめさきも栃木だったし、いつまでも父の実家に世話せわになっているというわけにもゆかず、栃木から北東へすこしはなれた、壬生みよの知りあいのはなれをかりてうつることになった。中学生といえば、もう一人前で、やはりそれだけ六畳もせまくなった